

2023 年度入学試験問題

国 語

注 意 事 項

1. 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の注意事項をよく読んでください。
その際、問題冊子を開いてはいけません。
2. この問題冊子のページ数は 31 ページです。
3. 試験中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁および解答用紙の汚れ等に気付いた場合は、手をあげて監督者に知らせなさい。
4. 解答は解答用紙の問題番号に対応した解答欄ごとに 1 つだけをマークすること。
同じ解答欄に 2 つ以上マークすると無効となります。なお、解答用紙の番号は①～⑥まで記入してありますが、問題によっては解答する選択肢が 6 つ無い場合もあります。
5. 解答は HB の黒鉛筆を使用すること。
6. 誤ってマークした場合は、消しゴムできれいに消し、消しくずを完全に取り除いたうえ、新たにマークし直すこと。
7. 問題冊子の余白等は自由に利用してかまいません。
8. 解答用紙を持ち出してはいけません。
9. 試験終了後、問題冊子は持ち帰りなさい。

第一問 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

(注1) ジンメルの『貨幣の哲学』は、非常に難解であるが、貨幣の両義的側面をよく捉えていた。貨幣について多岐にわたる論点を未整理のまま展開しているくらいがあるが、本節では貨幣の本質についてのジンメルの考え方を一瞥しておきたい。

ジンメルも、マルクスとは異なる仕方(注2)で、貨幣の問題が近代に集中して現われるものであると考えていた。ジンメルは、ヘーゲルの如く、古典古代と近代の差異を主客の分離に求めていた。「古典古代の知的世界は、本質的に以下の事実の点で近代のそれとは異なっている。近代のみが、一方で包括的かつ明瞭な自我概念を発達させ……他方で客体概念の自立性と力強さを唱えていたのである」。そして、「主体と客体の素朴・実践的な統一を分裂させ、それぞれを他方との関連で意識させるこの緊張は、元をたどれば、欲求するという単純な事実を通じて生み出される。つまり、我々が所有しないしは享受をまだしていないものを欲求する場合、我々は、自分たち自身の外部に我々の欲求の内容を位置付ける。……我々は客体を欲求するが、それは、それらが即座に我々の使用や享受のために供されない場合においてのみである。つまり、それらが我々の欲求に抵抗する限りにおいてなのである。我々の欲求の内容は、それが我々に対立させられるや否や、客体となる」。我々が欲求しているものは、我々が既に入手し、享受できるものではないはずなのであるから、欲求の対象（客体）は、当然、我々に「対立」している。したがって、よりカツボウするものは、より対立しているもの、つまりはより手の届きにくい、享受しにくい、言わば「距離」のあるものとなる。この距離によって特徴付けられているものが「価値」である。

A ジンメルは、「客体は、価値があるがゆえに入手困難なのではなくて、それらを所有したいという我々の欲求を妨害するような客体を、我々は価値があると呼ぶのである」と述べ、対象（客体）を享受するということは、主体と客体との間の対立がなくなり、妨害が克服され、距離がなくなるということであるから、「価値を消費する」ことに他ならないと論じたのである。

この距離の概念は逆説的にも接近を前提としている。なぜなら、我々から遠い距離にあるものであるがゆえに欲求の対象になると同時に、そこに接近し享受したいと考えるからこそ距離を感じ、価値があると思うからである。「引き離しと接近は実践

においては相補的な観念である。そのそれぞれが他方を前提にしており、客体に対する我々の関係性の二つの側面を成している。それこそが、主観的には我々の欲求と呼び、客観的にはそれらの価値と呼んでいるものなのである」。引き離され、隔たりがあるからこそ、そこに接近したいと思うのであるし、そのために犠牲を払っても惜しくないと考ええる。「犠牲の必要性、欲求の満足には代償が求められるという経験は、この関係性を強調ないしは激化したものにすぎない」というわけである。したがって、「犠牲の結果として価値を理解する」のであるが、何かを求めるときには何かを犠牲にし、「一つの価値を獲得するためには、一つの価値が提供されねばならない」というのであるから、当然ながら対象を獲得するためには、交換という関係を考えなくてはならなくなるだろう。

交換関係は相手のあることであるから、言うまでもなく、超個人的関係なのであるが、自らの主観のみで価値評価することはできず、等価によって交換が成立するということを考えれば、相手の価値評価も入ってくるので、価値は、主観と相即的なものではなく、自立的、客観的な側面を有するようになるだろう。「我々が意識し、そして交換を通じて我々が関心を抱くようになってゆく等価性というものは、価値に独特の客観性を付与する」。

B

この等価性という客観的なものは、「それらの要素のいずれにも含まれておらず、どちらの要素の外にも存在しない客観的な契機」であり、ジンメルは、マルクスと同様、価値の超感覺性にも気付いていたと言つてよい。

ジンメルによれば、「人間間の多くの関係は交換の形式として解釈される」のであり、会話や愛も交換関係なのであるが、「経済的交換は……常に他の有用な財の犠牲を意味する」。

C

こうした犠牲なく全てのものが手に入るとしたら、交換、つまりは経済そのものが成立しえなかったであろう。まずは主体が客体（対象）から分離され、この離れた距離を克服しようとして——「欲求がこの距離を克服するための労苦と同等と見なされる」ことで——価値が生じ、他主体との「二者間の需要強度の測定」による「一定の価値量」が等価性を成立せしめ、それに見合った犠牲を払って対象を獲得すること、それが経済的交換のプロセスなのである。

対他的交換の中で価値が生じるという、こうした考え方が、ジンメルの「あらゆる概念は他の概念との関係においてのみ真で

ある」という相対主義の哲学と結び付いているというのは理解に難くない。命題Aは命題Bによって証明され、命題Bは命題Cによって証明されるが、命題Cは結局命題Aによって真理性を証明されているといったように、「相互性の中で認識の内的諸要素は相互に真理の意義を証明しあう」のであり、我々に絶対普遍の真理が認識できない以上、「真理もそれゆえ関係概念」とならざるをえない。絶対普遍の真理という基準ないしは⁽¹⁾ケイリュウ点が存在しえないために、「認識は自由に浮遊する過程」となる。相互性の中で真理が生成されるのであれば、その相互関係の範囲でのみ、ある真理は妥当するのであるし、先述したように絶対的真理という基準がない以上、相互関係の中で何が真理として生成されてくるのかというと、有用性があるというものでしかないだろう。「真理は、それが真であるがゆえに有用なのではなく、その逆なのである」。ある相互関係を形成している組織や生活の内部において、様々な概念が存在しうるが、ある概念に基づいた行動は破滅的になり、ある概念に基づいた行動が有益であったのであれば、その相互関係の中においては、後者の概念が前者の概念を「淘汰」して、真理に近づく。「実際、我々は、表象の真理性に対する決定的な規準を、その基準に基づいた行為が望ましい帰結をもたらすということ以外に、全く有していないのである」。したがって、「異なった組織と生活条件が存在するのと同じだけ多くの本質的に異なった真理が存在するのである」。

ジンメルは絶えざる相互性の中で有益な表象が真理として生成してくるというのであるが、主体と他の主体との経済的交換から生成してくる経済的価値も同じようなものだと考えていた。実際、他者の内面は、自らが唯一熟知する自らの内面との類推によって推し量るしかないという文脈で、「心的現象について知るといふことは、我と汝の間の相互作用に他ならない。諸要素相互の継続的なやり取りと交換の中で、各々が他者に関係してゆく。それを通じて、真理が、経済的価値と同様に、生み出されるのだ」と述べていた。諸個人の主観的利益が衝突し、キン⁽²⁾コウし、掣⁽³⁾肘しあうことで、「要求と制限との交換を通じて衡平と正義という客観的形式」が獲得され、客観的な法規範が成立するように、経済的価値も、諸個人の主観的欲求の相互作用の中から、客観性をもつようになり、その相互作用が無限に近づくほど、その客観性は絶対的なものに近付いてゆく。ジンメルは、「絶対的なものは存在するが、それはただ無限の過程によってのみ把握されうる」、

D

、「関係のみが存在するが、それは無限

の過程の中で絶対的なもの取って代わりうるだけである」と述べて、このことを表現している。したがって、⁽¹⁾ジンメルの相對主義は絶対的なものを全否定するものではなく、絶対的なものの認否という「二者択一を退ける」ものなのである。

そして、こうした相互作用が事物の価値を生み出し、その自立的な表現として、貨幣が発展してきたのである。「事物の価値は、その経済的相互作用として解釈されるし、貨幣において、その最も純粋な表現と具象的形態を獲得している。……客体の経済的価値がそれらの交換可能性の相互的關係によって生み出されるとすれば、貨幣は、この關係の自立的表現であるということになる」。

ジンメルによれば、最初に物々交換が行われるようになると、最も需要のあるものが最も取引されるので、他の商品によってその価値が頻繁に測定され、一般的価値尺度になる。したがって、「最も必要とされ、最も価値のある客体が、貨幣になる傾向がある」。しかし、人間は、知的能力の発達、文化的発展に伴って、貨幣をその素材とは切り離して抽象化し、象徴として扱うようになる。「知的能力と抽象的思考の成長は、貨幣がますます単なる象徴となり、その固有の価値に関しては中立的になってゆく時代を特徴づけている」。

E 貨幣というものは人間の知性ないしは文化そのものを象徴していると言ってよいだろう。人間の知性や文化の発展に応じて、有用な消費財が貨幣となった「固有の価値をもつ貨幣」から、素材的価値より抽象化された「抽象的貨幣」へと発展してゆくのである。今日の仮想通貨などは、素材から完全に切り離された単なる電子記号になっているのであるから、最高度の知的・文化的発展の成果だということになる。金銀に関しては、その中間である「宝飾的貨幣」であるとジンメルは位置付けた。

しかし、⁽²⁾貨幣はそもそも抽象化する契機を包蔵していると言えるだろう。本質的に、貨幣の素材としての側面は、貨幣の機能としての側面とは両立しえない。貨幣の「素材が、その実践的、⁽³⁾シンピ的、ないしはその他の価値を示すや否や、流通から引き上げられ、最早貨幣ではなくなる」からである。そのかわりに、「貨幣は、自らがもつ価値を交換手段として獲得した」のであり、貨幣の価値蓄蔵手段などの他の機能は、この「交換手段としての貨幣の機能の派生物」にすぎない。交換のないところに貨幣は存立しえないとするならば、「貨幣は、人間の満足を他者に常に相互依存させる関係性の表現であり、媒介物である」

ということになる。

ところが、こうした経済的価値の純粹な象徴としての貨幣は、あくまでも理想であつて、「貨幣は物質的価値という残滓を捨て去ることができない」という点にもジンメルは気付いていた。ただ、完成することはなくとも、この目標に向かつているように貨幣は進歩してゆくと考えていた。貨幣実体から遊離してゆく過程については、ジンメルもいくつかの理由を⁽⁴⁾あげているが、非常に重要なものは信用ないしは信頼であろう。ジンメルの見るところ、大金融家のフッガー家などが没落したのも、スペインがオランダに経済的に敗れたのも、信用制度の未成熟に一因があり、オランダは実体としての貨幣をあまり有していなかったが、信用を基礎にしていたがゆえに、信用のないスペインよりも有利であつた。そうであれば、貨幣の素材という物質的側面が重要なのではなく、信用がはるかに重要だということになる。貨幣は「その本質的意義において実際に貨幣であればあるほど、その物質的意味において、貨幣が貨幣である必要はなくなつてゆく」。逆に、貨幣の素材的価値を重視せず、貨幣の抽象化、象徴化が進んでいる経済社会においては、文化も進んでいるはずであるし、取引上の信用のみならず、社会の安定性や緊密性への制度的信頼も厚いということにならう。

貨幣は完全に社会的な現象であり、人間の相互作用の一形式であるから、貨幣の性質は、社会関係が濃密になり、信頼され、快適になればなるほど、ますますハッキリと現われてくる。実際、文化的相互作用の一般的な安定性と信頼性が、貨幣のあらゆる外面的側面に影響を及ぼしている。相互的な保護が確約され、様々な基本的な危険から守られているような、安定的かつ密接に組織化された社会においてのみ、……紙のような脆くて簡単に壊れやすい物質が最高の貨幣価値を表象することができるのである。

貨幣は「交換的動物 (das tauschende Tier)」としての人間が相互作用することによって生起するわけであるから、「人間の相互作用の一形式」に他ならない。その素材としての価値の担保性が不要になるにつれて、相互的な信用の強化や信頼関係による

人間間の緊密化が進んでいることであるから、その経済社会の関係性は堅固であり、これまでの議論を踏まえれば、知的水準や文化水準も高いことになる。ということは、マルクスとは異なり、貨幣を人間の共同性と相反的に捉えておらず、むしろ貨幣は共同性の産物であり、その共同性の緊密さや文化などを象徴するものであると捉えていたわけである。しかも、その関係性というものは、物象的な貨幣的関係性 (cash nexus) ではなく、まさしく人間的な信頼関係であった。紙幣などといった素材的価値がなきに等しい高価な貨幣が流通しているということは、信頼関係が緊密であり、文化水準も高いことを示しているとして、⁽³⁾貨幣の抽象化にむしろ積極的な意味を付与していたのである。

社会や制度、政府への信頼、そして、経済社会の構成員への一般的な信頼というものが安定的になれば、貨幣を安心して授受し、経済活動を行うことはできまい。もっと言えば、「人々が互いにもつ一般的な信頼なしには、社会そのものが瓦解するだろう」。ジンメルは非常に興味深いことに、貨幣と引き換えに一定の商品を獲得することができると思えば、商人がある商品売れると思えば、特定の対象への信頼は「弱い形での帰納的知識」に他ならないが、不特定の公衆に対する信頼は、そこに「超理論的な信仰の要素」が加わっていると指摘する。社会における様々な経済的な取引を継続してゆくことによって、社会や公衆に対する信頼性は創発的に増大してゆくとしても、「実現の可能性が一〇〇パーセントに決してならないのが信用の本質」である。むしろ、社会における貨幣を介した経済的な取引が首尾よく成立する可能性が一〇〇パーセントであれば、信用や信頼というような概念そのものがナンセンスとなる。その必ず残る経済的な取引における不確実性を乗り越えて、信する根拠もないように思われる他者一般を信頼するには、宗教的な帰依にも等しいコミットメントが求められるはずである。そうしたコミットメントが可能であるためには、他者も同じものを価値ありと考え、同じものを信仰するだろうという、根拠はないが信するしかない「記述しがたい要素」が伏在していなければならない。

その人の何を信じるのかについて付言せず、考えることさえしないのに、『誰かを信じる』というのは、非常に理解しがたい深い言い回しを用いることである。それは、ある存在についての我々の観念と存在そのものの間に明確な関連性と統一性がある

り、それについての我々の概念の中に、ある一貫性が存在しており、……この概念に自我を委ねるのに確信をもっていて抵抗感をもっていないという感情を表している。経済的信用はこの超理論的な信仰の要素を含んでいるのである……。

これまで相手が誰であろうと貨幣を受け取ってもらって商品を獲得してきたし、これからもそうであろう、貨幣は価値あるものとして必ず受け取ってもらえるだろうという根拠なき慣習的感情、そして他者もそう考えているに違いないという、これまた根拠なき共同的感情、そうした盲信と言うべきものに自我を全面的に委ね、そこに抵抗感を感じないというのであるから、これは「超理論的な信仰」と言う他あるまい。その信仰には、経済的な取引や社会秩序や政治組織、公衆などへの信頼も含まれるが、その中心に存在しているものこそ、それらの結節点となり、それらを象徴している貨幣への信頼であり、⁽⁴⁾経済社会とは、まさしく貨幣を信仰する宗教共同体に等しいとさえ言うことができる。ジンメルは、貨幣を所有することで得られる安心感は、「社会・政治組織や秩序への信頼」を集中的に表していると述べ、貨幣に社会や制度への信頼を象徴させていたし、「通貨は、それを価値があると考ええる集団が大きくなればなるほど、より高い「素材的な」価値をもたなくてはならない」と述べて、通貨圏が拡大すれば、信頼や価値観の共有が希薄になるがゆえに、担保として貨幣そのものの素材的価値が高くなっては受け取ってもらえないとし、通貨圏を価値観や規範の共有体と結び付けて理解していた。当然、経済的な取引が緊密化し、「法、慣習、利害」が共有されてくれば、拡大した経済圏であっても素材的価値の低い貨幣が流通するのだが、貨幣というものが、いかに観念や価値観、信仰対象の共有によって支えられているのかという点について、ジンメルが深く考察していた証左であろう。マルクスは貨幣物神を批判したが、ジンメルにとつて、貨幣は、社会を分裂させるどころか、まさしく「神」として、宗教共同体としての経済社会の統合の象徴となっていたわけである。マルタ島の鑄貨に刻印されていたように、貨幣は「銅ではなく信頼 (non aes sed fides)」なのである。

(小島秀信『市場と共同性の政治経済思想』による)

(注1) ジンメル——一八五八年～一九一八年。ゲオルク・ジンメル。ドイツの哲学者、社会学者。形式社会学を提唱する。

(注2) マルクス——一八一八年～一八八三年。カール・マルクス。ドイツ出身の哲学者、経済学者。『資本論』の著者として有名。マルクス主義を打ち立て、社会主義・共産主義の必然性を説く。

(注3) ヘーゲル——一七七〇年～一八三一年。ゲオルク・ヴィルヘルム・フリードリヒ・ヘーゲル。ドイツの哲学者。ドイツ観念論を代表し、近代哲学の祖とされる。

*問題の作成上の都合で本文の一部に手を加えてある。

問1 傍線部(ア)～(オ)の漢字と同じ漢字を用いるものを、次の各群の①～⑤のうちからそれぞれ一つずつ選べ。解答番号

は 1 ～ 5。

(ア) カツ|ボウ

1

① 舞台でカツサイを浴びる
 ② 雪山でカツラクする
 ③ 新作をカツモクして待つ
 ④ キカツに苦しむ
 ⑤ 自由カツタツに生き抜いた

(イ) ケイ|リュウ

2

① フウケイ画を描く
 ② 裁判でケイソウ中の案件である
 ③ 作戦の指揮ケイトウを明確にする
 ④ 現地から生チュウケイする
 ⑤ 途中ケイカをチェックする

(ウ) キン|コウ

3

① 諸国が合従レンコウを繰り返す
 ② 窓にコウシをはめる
 ③ コウトウには声帯がある
 ④ 心筋コウソクを発症する
 ⑤ コウリュウ期限が終了する

(エ) シン|ビ

4

① 今後のホウシンをたてる
 ② 新商品に興味シンシンである
 ③ 広い構内はシンカンとしていた
 ④ 彼のシンソウ心理はわからない
 ⑤ 近所でフシンビが相次ぐ

(オ) ア|ゲテ

5

① 無謀なキヨに出る
 ② ケンキヨな態度が好ましい
 ③ 群雄カッキヨの時代
 ④ 申し出をキヨゼツする
 ⑤ 写真の転載をキヨダクする

問2 本文中の空欄 A ～ E を補うのに最も適当なものを、次の①～⑥のうちからそれぞれ一つずつ選べ。ただし、

同じものを二度以上用いてはならない。解答番号は A | 6、B | 7、C | 8、D | 9、E | 10。

- ① むしろ
- ② あたかも
- ③ その意味では
- ④ ないしは
- ⑤ したがって
- ⑥ しかも

問3 傍線部(1)「ジンメルの相対主義は絶対的なものを全否定するものではなく、絶対的なものの認否という『二者択一を退け

る』ものなのである」とあるが、「ジンメルの相対主義」の説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

解答番号は 11。

- ① 交換関係は、相互関係から価値が見出され、より有益なものが真理として生成されることで成り立つものであり、関係性が無限に近づくにつれ絶対的な関係になる。
- ② 経済的価値は自立的・客観的な側面を有するものであり、対他的交換によって生じる価値はあくまでも相互関係の中における主観的なものに過ぎず、経済的価値だけでは絶対的なものにはならない。
- ③ 主体と欲求の対象との距離によって価値が生じるのであって、等価値という客観的なものはもともと存在しておらず、経済的に絶対的なものは諸個人の主観的欲求の衝突の中からしか生まれえない。
- ④ 経済的価値は、諸個人の主観的欲求の相互作用の中から生じるもので、絶えざる相互性の中で有益な表象を生成し続けることで、絶対的な価値や真理に近付こうとする。
- ⑤ 相互関係の中で生成される真理とは、それを形成している組織や生活の内部に存在する様々な概念が有益であるか否かを自らが熟知する内面と照らし合わせることで量ることしかできない。

問4 傍線部(2)「貨幣はそもそも抽象化する契機を包蔵していると言えるだろう」とあるが、なぜこのように言えるのか。その

説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 12。

- ① 物々交換の中では最も価値のある客体であった貨幣は、経済社会の発展によって純粋な象徴物となった歴史の変遷を踏まえると、もはや「宝飾的貨幣」であることは許されないから。
- ② 貨幣は人間の相互作用の一形式であり、人間関係や、また社会関係の制度への信頼に応じて素材としての価値は不要となるから。
- ③ 相互的な信用の強化や信頼関係による人間間の緊密化が進む中での経済社会では、関係性が堅固なものとなり貨幣の素材としての担保性が不要となったから。
- ④ 貨幣は人間の知的能力の発達や文化的発展に伴い、有用な消費財から抽象的な存在へと発展し、今日の仮想通貨のように記号化されたから。
- ⑤ 紙のようにもろくて壊れやすい物質である貨幣が活発化する経済社会においていつまでも素材としての価値を保てるはずはなく、形態自体が社会にそぐわないから。

問5 傍線部(3)「貨幣の抽象化にむしろ積極的な意味を付与していたのである」とはどういうことか。その説明として最も適当

なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 13。

- ① 貨幣の抽象化を支える社会や人間相互の関係が築きあげた知的・文化的発展の成果であると見なしていた。
- ② 貨幣の抽象化を可能にする国力や経済力を評価する基準の一つになり得ると見なしていた。
- ③ 貨幣の抽象化とは社会や制度、政府などの不特定多数への信頼が必要となる超理論的なものであると評価した。
- ④ 貨幣の抽象化は取引上の信頼や社会の安定性といった経済社会の到達度をはかる目安になったと評価した。
- ⑤ 貨幣の抽象化とは経済社会の構成員への信頼が不可欠であり、社会が瓦解する危険性のないことの象徴と見なした。

問6 傍線部(4)「経済社会とは、まさしく貨幣を信仰する宗教共同体に等しい」とあるが、この前提となるものの説明として最

も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 14。

- ① たとえ経済圏が拡大したとしても、観念と価値観、信仰対象の共有によって支えられた貨幣は、素材的価値が低くなつたとしても経済社会の統合の象徴として信じられるということ。
- ② 経済的取引における不確実性を乗り越えて貨幣を受け取ってくれるだろうと思ひ、また相手も受け取ってくれると考えているだろうという感情を全面的に信じること。
- ③ 何を信じるのかについて考えることさえしないのに誰かを信じるという、非常に理解しがたい観念の中にも一貫性があり、貨幣はこの超理論的な要素を含んでいると信じること。
- ④ 法や慣習・利害といった価値観や規範を共有するに際して、それを結び付ける中心的存在である貨幣の素材的価値を信じること。
- ⑤ マルタ島の铸貨の刻印に象徴されるように、貨幣は常に素材的な価値よりも共同体内での使用価値の方が高いと信じること。

問7

本文中にあるジンメルの考え方と合致するものを、次の①～⑥のうちから二つ選べ。解答番号は

15

・

16

。

- ① 欲求の対象を手に入れるためには犠牲を払っても惜しくないと考える価値を提供し、その対象と交換することが必要となるが、交換関係は相手があることなので価値はその対象によって評価されることになる。
- ② あらゆる概念は他の概念との関係において初めて真理性が証明されるという相対主義の哲学においては、関係性の中における価値観のみが真理としての条件となる。
- ③ 知的・文化的に高度な社会になるにつれて、本来は最も需要のあるものであった貨幣が素材から切り離されて抽象化され、象徴として扱われるようになっていく。
- ④ 交換のあるところに存立する貨幣は素材としての物質的側面よりも交換関係の中で成り立つ信用制度の方が重要であり、貨幣を媒介として信用による安定した社会が実現する。
- ⑤ 貨幣を介した経済的取引は、見ず知らずの人を信用するという根拠のない慣習的感情に自らを委ねるもので、理論を超えた信仰的な要素が加わった、人間による調整が不可能なものとなる。
- ⑥ 貨幣を所有することで得られる安心感や社会秩序や政治組織、公衆などへの信頼によるものであって、通貨圏が広がるにつれ貨幣は観念や価値観を共有する象徴となっていく。

第二問 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

(注一)
ロールズ『正義論』が想定する公正な世界は市民すべてに生産物を平等に分配するのでもなければ、かつて共産主義が目指したように各自の能力に従って労働し、必要に応じて生産物を受け取る社会でもない。ロールズは次の条件下で貧富の差を正当化する。人間は能力に違いがあり、能力の高い者はその能力を最大限に利用し、社会の底辺に生きる人々の生活向上に役立てる必要がある。累進課税や社会保障制度などにより貧富の差を是正し、下層の人々の生活を改善すべきだ。かといって均等化が進みすぎると能力の高い者の労働意欲をそいだし、彼らの生産性向上に必要な学習期間のための資源が乏しくなり、その能力を活かせない。すると社会全体の生産性が低下し結局、貧困な市民の生活がかえって悪化する。したがって底辺にいる者の生活をよい状態に保つために必要な貧富の差は正当化される。

遺産や家庭環境から生ずる個人差はどうすべきか。生まれたばかりの赤ん坊を親から取り上げ、国家が平等に管理すれば、家庭環境の違いから生ずる能力差は緩和される。だが、このような過激な政策を支持する理論家は今日まじない。それに遺産による能力差はなくしやうがない。機会の平等をいくら唱えようとも、最初から不平等な条件を背負い込んで人間は生きざるをえない。ロールズは言う。

富の遺産相続における不平等は知能の遺産に比べれば、より本質的な不公平だとは言えない。確かに前者は社会管理しやういだろう。しかし最も大切なのは、これら二種類の不平等が格差原理に可能な限り適合することだ。つまり遺産・遺産相続から生ずる不平等が、最も恵まれない者の利益向上のために活かされ、自由と機会における公正な平等原則と両立する限り遺産相続は認められる。

(1) 遺産や遺産相続から生ずる個人差をなくす必要はない。競馬では過去の実績が高い馬ほど重い負荷を背負わせてレースの結

果を予想し難くするが、そのような仕方では平等化しない。避けられない個人差は X として受けとめた上で、能力の高い者が社会全体の利益に貢献できるシステムを考えるべきだと『正義論』は説く。上位者は能力の高さゆえに下位者より恵まれた生活を享受する権利を持つのではない。能力差は親から受けた先天的性質に加え、家庭教育および社会環境の影響から生ずる。本人の責任ではない。格差をつけないと社会の総生産力が低下し、下層の人々の生活が悪化するからにすぎない。 I 貧富の差を残すのは社会全体の生産性を高めるための単なる方策だから、底辺に位置しても劣等感を抱く必要はないし、上位者に嫉妬するのもまちがっている。

「……」羨望は集団にとって有害だ。他人を羨望する者は自分との差を縮めようとして結局、他者だけでなく自分自身に対しても害をなす。

「……」他者の利益を減らせるとしても、そのために自分自身にも害が跳ね返るならば、他人の不幸を誰も望みはしないだろう。

だが、ロールズの目論見通りに人間は他者との格差を納得できるだろうか。

欲望は他者との比較から生ずる。^(金) アリストテレスは『弁論術』「羨望」(第二卷第一〇章)において近しい比較対象との差が問題になると指摘した。

妬みを抱くのは自分と同じか同じだと思える者に対してだ。同じ人とは家系・血縁関係・年齢・人柄・世評・財産などで同じような人のことだ。「……」時や場所や年齢、世の評判などで自分に近い者を妬む。「……」競争相手や恋敵、一般に同じものを目指す者と人々は名誉を競う。そのため彼らに必ず嫉妬心を覚える。

自分の状況に対する満足度は比較対象に左右される。第二次世界大戦中、米黒人兵士の不満は南部出身者よりも北部出身者の方が強かった。準拠集団が異なるためだ。人種差別の強い南部では黒人の生活水準が低いため、戦線での生活が必ずしも苦にならない。しかし南部ほどには差別が激しくない北部出身者は残留の黒人と自らとを比較して不満が募る。

社会の底辺に生きる者が肯定的アイデンティティを持てるかどうかは社会資源の分配だけで決まらない。封建社会では出生により身分が固定された。しかし下層の間は上層との比較を免れるため、近代社会に比べて羨望に悩まされにくい。下位集団から上位集団へ移動できないカースト制やアパルトヘイト制度と違い、民主主義社会では階層間の移動が可能だが、それゆえに下位の者は上位に自己同一化する傾向が強くなり、不満を強く感じる。

II

ユダヤ系ドイツ人は一九世紀中葉以前よりもゲットー消滅後に深刻なアイデンティティ問題を抱えるようになる。ゲットー時代、ユダヤ人と非ユダヤ人の間の隔たりは相互に維持されていた。ところが解放をへて両者の距離が小さくなり、接触の機会が増えるにつれてユダヤ人の Y Y が増す。上位集団（非ユダヤ人）の仲間に「もう少しでなれる」という心理がユダヤ人に生まれるからだ。憧憬する上位集団に実際に入れるかどうかかわからない不確かな状況は、伝統社会における絶対的排斥以上に耐えがたい。上位集団に移動する期待が高まるにつれて格差への不満が強まる。差別を公然と制度化する伝統社会に比べて、より平等な近代社会が人間を幸福にするとは限らない。

III

民主主義社会の出現を前にしてトクヴィルは言った。

彼らは同胞の一部が享受していた邪魔な特権を破壊した。だが、それによりかえって万人の競争が現れる。地位を分け隔てる境界そのものが消失したわけではない。単に境界の形式が変化しただけだ。「……」不平等が社会の常識である間は、最も著しい不平等にも人は気づかない。対して、すべての人々がほとんど平等になった時には、どんな小さな不平等でも人の気持ちを傷つけずにはおかない。だから平等が増大するにしたがい、より完全な平等への願望が一層いやしがたくなり、より大きな不満が募らざるをえない。

羨望が生まれるのは他者との差が正当な基準に則っていないからだ。他者との差が公平な基準の結果だと知れば、他者の優越を素直に喜べる。IV そうすれば羨望は消え、下層の者も社会秩序を遵守するだろう。

合理的な人間は羨望の虜にならない、少なくとも自他の格差が不正義の結果でないと理解し、格差があまりにも酷くない限り、そうである。

だが、このようなフェアプレー精神はまれだ。比較の対象にならないほど能力が違えば羨望は起きない。生まれるのは尊敬の念だ。歴史に足跡を残した偉大な芸術家やスポーツ選手あるいは天才思想家に自分は到底かなわないと認めても我々の価値は貶められない。そもそも比較の対象にならないから、相手の価値の承認が自らの否定につながる。しかし能力が拮抗する者に前に自らの劣等性を受け入れるのは辛い。V

人間は損得勘定して自らが得る総量を最大にする状況を選ぶ合理的存在ではない。実質的利益を犠牲にしても、他者に比べて劣勢にならない状況を求める。例えば自分が八〇〇〇円獲得し、他者が一万円得る状況Aと、自分は五〇〇〇円でも相手も五〇〇〇円しかもらえない状況Bのどちらかを選択できる場合、状況Aよりも状況Bを好む者の方が多い。羨望の裏に劣等感が隠れているからだ。「鶏口となるも牛後となるなかれ」と『史記』も言う。⁽²⁾ ロールズの提唱する世界秩序は人間心理を考慮しない砂上の楼閣だ。

民主主義社会では不平等を正当化する論理がもはや存在しない、これがトクヴィルの指摘した近代の本質だ。『トクヴィル平等と不平等の理論家』^(注4)において宇野重規は述べる。

「……」トクヴィルにとって、真に人民主権によって民主的共和国が維持されるとは、容易には信じがたい事実であった。というのも、トクヴィルによれば、平等化した社会において、「民主的人間」はそれ以前の社会を構成してきたさまざまな上下

関係やヒエラルキーを否定してしまうからである。「デモクラシー」は、それまでの親子のあり方からはじまって、男女の関係、主従の関係、教師と生徒の関係、そして社会の関係一般を、根本から覆してしまう。誰が誰の上位に立ち、権威を持つかは、もはやまったく自明性を失うのである。いかなる上下関係も自然のものとは認められなくなり、あらためてその根拠を問ひ直されるのが「デモクラシー」の社会であった。

そのような「デモクラシー」の社会において、およそ秩序というものは成り立ちうるものだろうか。そして、「デモクラシー」の社会は、自らの秩序原理を持ちうるのか。

すべての人間を平等に扱い、物質・文化資源を均等に分配する社会は存在しない。したがって格差を正当化する何らかの機制が必要になる。封建制度やカースト制度など身分制社会では、貧富や身分を区別する源泉が共同体の〈外部〉に投影されるため、不平等があっても社会秩序は安定する。人間の貴卑は生まれで決まる。貧富や身分の差があるのは当然だ。

⁽³⁾近代以前の伝統社会と近代社会とを区別するのは平等・不平等の事実ではない。民主主義社会も依然として不平等な社会だ。程度の差でもない。両者の違いは他にある。伝統社会では身分が運命によって定められ、まさに格差の存在が秩序の正しさを傍証する。対して民主主義社会の人間はすべて同じ権利を持ち、正当な理由なくして格差は許されない。伝統社会にとって平等は異常であり、社会の歯車がどこか狂った状態を意味する。ところが逆に民主主義社会は平等でなければならない。しかしその実現が不可能だから、常に理屈をつけて格差を弁明しなければならぬ。

どんなに考え抜いても人間が判断する以上、格差基準が正しい保証はない。社会の底辺に置かれる者は既存の社会秩序に不満を抱き、変革を求め続ける。近代社会では、完全平等というアトラクタ^(注)に抗するための正当化を永久に強いられる。〈外部〉に支えられる身分制社会と異なり、人間が主体性を勝ち取った近代民主主義社会は本質的に不安定なシステムだ。近代社会の激しい流動性の一因がここにある。

(小坂井敏晶『増補 責任という虚構』による)

- (注1) ロールズ——一九二一年～二〇〇二年。ジョン・ボードリー・ロールズ。アメリカの哲学者。
- (注2) アリストテレス——前三八四年～前三二二年。古代ギリシアの哲学者。プラトンの弟子。
- (注3) トクヴィル——一八〇五年～一八五九年。アレクシ・ド・トクヴィル。フランスの政治思想家・政治家。
- (注4) 宇野重規——一九六七)。日本の政治学者。
- (注5) アトラクタ——安定状態。力学用語。

*問題の作成上の都合で本文の一部に手を加えてある。

問1 本文中の空欄 I Ⅰ V のうちで、次の文を補う箇所として最も適当なものを、後の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 17。

したがって大切なのは公正な基準を定め、その正しさが誰にも納得できるように説明することだ。

- ① I ② II ③ III ④ IV ⑤ V

問2 空欄 X X Y を補うのに最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうちからそれぞれ一つずつ選べ。解答番号は 18・19。

- | | |
|------|------|
| Y | X |
| ① 希望 | ① 所与 |
| ② 葛藤 | ② 余剰 |
| ③ 自我 | ③ 自明 |
| ④ 主観 | ④ 遺伝 |
| ⑤ 出自 | ⑤ 恩恵 |

19 18

問3 傍線部(1)「遺伝や遺産相続から生ずる個人差をなくす必要はない」とあるが、このように言えるのはなぜか。その説明と

して最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 20。

- ① 人間には能力に違いがあり、能力の高い者が下層の人々の生活を改善するために累進課税や社会保障制度が生み出されたのであって、結果として国家が平等に管理をしていることになるから。
- ② 遺伝による能力差はなくしようがなく、先天的に高い能力を受けた者には、最も恵まれない底辺に生きる人々の生活向上のために社会総生産力を向上させる義務があるから。
- ③ 機会の平等をいくら唱えたところで人間は最初から不平等な条件を背負い込んで生きざるをえず、恵まれない者の利益向上のためには自由と機会における公正な平等原則が必要だから。
- ④ 遺伝や遺産相続といった避けられない個人差を均等化すると、能力の高い者の労働意欲をそぎ社会の総生産力が低下し、結果として底辺にいる者の生活が悪化するから。
- ⑤ 公正な世界とは能力の違いを前提としたものであって、市民すべてに生産物を平等に分配するものでもなければ、各自の能力にしたがって労働し必要に応じて生産物を受け取る社会でもないから。

問4 傍線部(2)「ロールズの提唱する世界秩序は人間心理を考慮しない砂上の楼閣だ」とはどういうことか。その説明として最

も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 21。

- ① 比較の対象にならないほど能力が違えば羨望ではなく尊敬の念が起るのであって、下層の人々の価値が下がるものではないというロールズの主張は実現できないものの理想としての意義がある。
- ② 人間は損得勘定をして生きる合理的存在ではなく、常に他者と比較しより上位に立とうとする状況を求める存在であるというロールズの主張は、今後の社会の変動を考える上で基盤となる。
- ③ 他者との差が公平な基準に則ったものであれば下層の者が上位者を羨望することもなく社会秩序も遵守するというロールズの主張は、理想に過ぎず実現することはない。
- ④ 自他の格差が正当な基準によるものであり、かつ、あまりにも酷くない限りにおいて社会秩序が守れるというロールズの主張は、長い歳月をかけて積み上げた不動のものである。
- ⑤ 不平等を正当化する論理が存在しない民主主義のもとにあつて人間の能力差を埋めることで社会が安定するというロールズの主張は、現実社会をよく反映したものである。

問5

傍線部(3)「近代以前の伝統社会と近代社会とを区別するのは平等・不平等の事実ではない」とあるが、では何が区別するのか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 22。

- ① 差別を公然と制度化する伝統社会では変革を求め続ける不満が生じなかったのに対し、正当な理由なくしての差別が許されない近代民主主義社会では不満が生じるという違い。
- ② 近代以前の伝統社会では社会を構成するさまざまな上下関係を正当化するシステムが確立されていたが、近代民主主義社会ではそのようなシステムの必要はなくそもそも不安定なものであるという違い。
- ③ 封建制度やカースト制度では上下の誰もが納得できる公正な基準があったのに対し、近代民主主義社会では誰が誰の上に立ち権威を持つかの自明性はなく公正な基準を示せないという違い。
- ④ 近代以前の社会では身分制のもとで格差を見直す機会がなかったのに対し、近代民主主義社会ではヒエラルキーを否定することであらゆる社会関係の根拠を問い直す機会を獲得したという違い。
- ⑤ 近代以前の社会では不平等を正当化する理由が身分制に代表されるように共同体の外部にあったのに対し、近代民主主義社会では不平等を正当化する論理が存在しないという違い。

問6

本文の内容と合致するものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

23。

- ① ロールズは、遺伝・遺産相続から生じる不平等は能力のある者が社会全体の生産性を高めることによって解消されていくので、正当な基準を定めることで下層の者も社会の秩序を受け入れるであろうと述べている。
- ② アリストテレスは、下位者が上位者に対して嫉妬するのは言うまでもなく、人々は自分と同じか同じと思える人に対して妬みを抱き、同じものを目指す者と人々は名誉を競い嫉妬心を覚える、と述べている。
- ③ トクヴィルは、封建社会よりも平等化された近代民主主義社会においては、誰もがより平等になることを求めて不平等を強く意識し、より大きな不満が生じると述べている。
- ④ 宇野重規は、トクヴィルの論理を伝統社会では自明であったすべての上下関係の根拠を問い直すところから民主化が始まると整理している。
- ⑤ 筆者はロールズの論理について、人間心理を考慮していない経験論とした上で、トクヴィルの論を踏まえて民主主義社会の根源には不安定さがあると指摘している。

第三問

以下の問いに答えよ。

問1

次の文の「た」と用法が同じものとして最も適当なものを、後の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は **24**。

相手の間違ったと思われる意見も、やはり尊重しなければならない。

- ① 彼は、誰にでも歌を聴かせたがる。
- ② 今日は、見たかった映画を見に行く。
- ③ 友人は、旅行が楽しかったと喜んだ。
- ④ 昨日は、寒かったから重ね着をした。
- ⑤ 登校中、変わった形の車を見た。

問2

すべて正しい漢字が適切に使われている文を、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は **25**。

- ① 難関を恐れず挑むように教え諭された。
- ② 古い資料を整理して策引を作成した。
- ③ 世間に完璧な人間など存在しません。
- ④ 諸外国との外交信頼関係を醸成する。
- ⑤ 言葉は意思の伝達を媒体する。

問3

A・Bの外來語とその訳語の組み合わせとして正しく・なく・ないものを、各群の①～⑤のうちからそれぞれ一つずつ選べ。解答番号は 26・27。

A

26

- ① パターナリズム―母權主義
- ② モラトリアム―猶予期間
- ③ パラダイム―理論的枠組
- ④ フェティシズム―呪物崇拜
- ⑤ エゴイズム―利己主義

B

27

- ① コミュニタリアニズム―共產主義
- ② リバタリアニズム―自由至上主義
- ③ リベラリズム―自由主義
- ④ ネオリベラリズム―新自由主義
- ⑤ ポピュリズム―民衆主義

問4

次のX～Zの漢字と読みの組み合わせとして正しくないものを、各群の①～⑤のうちからそれぞれ一つずつ選べ。解答番

号は 28 30。

X 28

- ① 金釘流—かなくぎりゅう
- ② 信憑性—しんぴようせい
- ③ 大雑把—おおまか
- ④ 胸三寸—むねさんずん
- ⑤ 破廉恥—はれんち

Y 29

- ① 懸念—けねん
- ② 氾濫—はんらん
- ③ 搾取—さくしゅ
- ④ 俯瞰—ふえん
- ⑤ 範疇—はんちゅう

Z 30

- ① 市井—しせい
- ② 所以—しよい
- ③ 拘泥—こうでい
- ④ 時雨—しぐれ
- ⑤ 示唆—しさ

問5

次のX～Zの四字熟語の空欄

を補うのに最も適当なものを、各群の①～⑤のうちからそれぞれ一つずつ選べ。解答

番号は

～

。

① X 実力 仲

② 拍

③ 伯

④ 舶

⑤ 白

① Y 月下 人

② 歌

③ 粹

④ 氷

⑤ 俳

① Z 一 同仁

② 恣

③ 諮

④ 賜

⑤ 視

問6 次の熟語の意味として最も適当なものを、後の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は **34**。

可塑性

- ① 固体に外部から力を加えて形は変わるが色調は変化しないこと。
- ② 固体に外部から力を加えて形や性質を変えるチャンスを待ち望むこと。
- ③ 固体に外部から力を加えるだけでは決して形や性質を変えないこと。
- ④ 固体に外部から力を加えて形や性質を変えたとき元に戻らないこと。
- ⑤ 固体に外部から力を加えて形や性質を変えてもすぐ元に戻ることに。

問7

慣用句の使い方です正しいものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

35。

- ① 助言を頼んだがとりつく暇もなかった。
- ② 今となってはすべて後の祟りだ。
- ③ この事件は氷山の頂きに過ぎない。
- ④ 彼は舌先の乾かぬうちに嘘をつく。
- ⑤ 私は信頼を裏切って恩師の顔に泥を塗った。

問8

作家（訳者）と作品の組み合わせとして正しくないものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

36。

- ① 外山正一 —— 『新体詩抄』
- ② 高村光太郎 —— 『春と修羅』
- ③ 森鷗外 —— 『於母影』
- ④ 島崎藤村 —— 『若菜集』
- ⑤ 北原白秋 —— 『邪宗門』

【国語(1月31日)】

問題番号	正答	問題形式
1	4	一問一答
2	2	一問一答
3	1	一問一答
4	5	一問一答
5	1	一問一答
6	5	一問一答
7	6	一問一答
8	1	一問一答
9	4	一問一答
10	3	一問一答
11	3	一問一答
12	2	一問一答
13	1	一問一答
14	2	一問一答
15	3	複数組み合わせ順不問個別
16	4	複数組み合わせ順不問個別
17	4	一問一答
18	1	一問一答
19	2	一問一答
20	4	一問一答
21	3	一問一答
22	5	一問一答
23	3	一問一答
24	5	一問一答
25	4	一問一答
26	1	一問一答
27	1	一問一答
28	3	一問一答
29	4	一問一答
30	2	一問一答
31	3	一問一答
32	4	一問一答
33	5	一問一答
34	4	一問一答
35	5	一問一答
36	2	一問一答